特別企画展

三輪晁勢

一色彩の歓喜

2015.4.22 wed — 6.14 sun

開館時間｜午前9時30分―午後5時（入館は午後4時30分まで）但し、
毎金曜日は午後7時30分まで延長（入館は午後7時まで）
休館日｜月曜日［但し、5月4日（月・祝）開館・5月7日（木）休館］
観覧料｜一般 500円（400円）／高校・大学生 400円（320円）／小・中学生 200円（160円）
●（ ）は20名以上の団体料金　●65歳以上の方（要証明）および障害者手帳をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料
主催｜京都府、京都府立堂本印象美術館（指定管理者：公益財団法人京都文化財団）、京都新聞
助成｜一般財団法人 地域創造（京都・近現代の日本画展シリーズ）
協賛｜野崎印刷紙業、ヤサカ自動車株式会社
後援｜NHK京都放送局、MBS、KBS京都、エフエム京都
お問い合わせ｜〒603-8355 京都市北区平野上柳町26-3
TEL 075-463-0007　http://insho-domoto.com/

京都府立 堂本印象美術館
KYOTO PREFECTURAL INSHO-DOMOTO MUSEUM OF FINE ARTS

夢科高原にて（部分）　1968（昭和43）年

34年ぶりの大回顧展!!　鮮やかな色が奏でるエネルギッシュな世界を紹介!!

1

MIWA CHŌSEI

特別企画展

三輪晁勢—色彩の歓喜

1901年(明治34)、新潟県三島郡与板町(現・長岡市)に生まれた三輪晁勢は、日本画家・堂本印象の一番弟子でした。1914年(大正3)に与板尋常小学校を卒業すると、洋画家の父・大次郎が京都府画学校に学んだこともあり、一家で京都に移りました。翌年には京都市立美術工芸学校予科に入学、その2年後には同校絵画科に入学しました。さらに、1921年(大正10)には京都市立絵画専門学校に進学し、上村松篁、麻田辨自、池田遙邨らとともに日本画を学びました。

1927年(昭和2)の第8回帝展に《東山》が初入選、第12回展で《春丘》および第15回展で《舟造る砂丘》が特選となり、晁勢は新進気鋭の作家として注目されました。戦後は、師印象の影響を受けながらも 、鮮やかな色彩で独創的な抽象表現を試み、1961年(昭和36)には《朱柱》で日本芸術院賞を受賞しました。その後も鋭い観察力と独自の色彩感覚によって花鳥や風景、人物などを描き、日本画壇に大きな足跡を残しました。

本展は、数ある晁勢作品のなかから、本画と水彩画、挿絵などを合わせた約120点を紹介します。34年ぶりとなる三輪晁勢回顧展を通して、現代にも通じる鮮烈で生き生きとした表現をお楽しみいただければ幸いです。

●期間中、一部の作品を入れ替えます。

1. 舟造る砂丘　1934年　京都市美術館　2. 朱柱　1961年　日本芸術院　3. 木屋町の家　1956年　京都府立総合資料館(京都文化博物館管理)　4. チチの実　1974年　京都市美術館　5. 椿　1978年　越前市武生公会堂記念館　6. 蕗薹　1980年　新潟県立近代美術館・万代島美術館　7. 春風 吉野　1964年　8. 富士高原野鳥園にて　1971年　9. 養老の滝　1965年　10. 富士高原　1968年　11.「田之助紅 続編」(「京都新聞」1948年1月24日朝刊)　12.「利休手毬」(「京都新聞」1952年9月26日夕刊)　13.「明治大帝」(「サンデー毎日」1956年5月号)

2

3

●講演会

5月3日(日・祝)「三輪晁勢の人と芸術」

原田平作氏(大阪大学名誉教授)／三輪晃久(日本画家・当館館長)

5月24日(日)　対談「三輪晁勢先生を想う」

由里本出氏(日本画家)／三輪晃久(日本画家・当館館長)

聞き手｜山田由希代(当館主任学芸員)

時間｜14:00−15:30

場所｜堂本印象美術館ロビー(要入館券)

●ギャラリーツアー

4月26日(日)／6月7日(日)

時間｜14:00から

場所｜1階ロビー集合(要入館券)

より楽しく作品をご覧いただくためのヒント

4

5

6

交通のご案内

JR京都駅より市バス50番、JRバス(立命館大学前経由)

阪急電車烏丸駅より市バス12番、55番

京阪電車三条駅より市バス12番、15番、59番

JR円町駅より市バス15番にて、いずれも「立命館大学前」下車

京都府立 堂本印象美術館

〒603-8355　京都市北区平野上柳町26-3

TEL. 075-463-0007　http://insho-domoto.com/

展覧会、関連イベント情報など随時更新中！

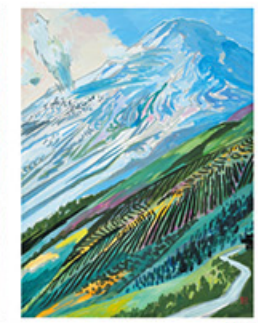
Facebook　http://www.facebook.com/InshoDomoto

水彩画｜自由自在な色彩でさわやかな情感が表されています。

7

8

9


10

挿絵｜新聞や雑誌の連載小説の挿絵も手がけ、読者の心をとらえました。

11

12

13